緒　言

『マネジメント・ジャーナル』第3号は、発刊の理念にたち戻り、査読論文を中心に編集した。また特集を「経営学の対象の見直し」とし、経営学の方向性を示す性能の良い羅針盤作りに励むことにした。

査読論文は大学院で経営学関連の研究科を擁しているところを対象に公募した。今回7本の応募があり、最終的に3本が採択、掲載されることになった。査読は経営学関連学会でご活躍の第一線研究者にお願いし、25名の方からご快諾を得た。1論文につきテーマに見合った専門領域をもつ審査員2名に査読をお願いした。査読者一覧は巻末に記した。私学の研究所であっても、学会並みの査読体制をとることができたことは、今後の研究雑誌編集にとって、大きな自信となることは間違いないであろう。

一方、依頼論文の特集テーマである「経営学の対象の見直し」では、ご多忙のなか3名の研究者に寄稿していただいた。

最初は麗澤大学の大橋照枝氏による「ブータンのGNH（国民総幸福）国家経営に学ぶ－日本の小規模自治体でもとり組める－」である。同氏はわが国におけるGNH概念構想の先駆者である。また幸福概念の測定指標設計者でもある。ときに、幸福度世界一のブータンに現地調査に果敢に出かけていく(失礼！！)。単なる外国の事例紹介にとどまらず、わが国への幸福思想の浸透を試みる。荒川区の“幸福度”をGAH（グロス・アラカワ・ハッピネス）と名づけ、本論で具体的に展開される。

つぎに明治大学の小林一氏には「経営戦略論のフロンティア―その現状と課題」のタイトルで執筆していただいた。経営学の主領域のひとつである“戦略論”に正面から取組み、従来型研究領域の偏り4側面に鋭く切り込みをかける。そればかりではなく、4側面それぞれに新しい方向づけを示すことによって、旧戦略論から新戦略論へのシフトを試みる。単なる評論ではなく、具体的な提言が用意される。文献も質量共に豊富である。氏そのものがまさしく戦略論のフロンティアなのである。

三人目は桜美林大学の馬越恵美子氏の「経営学の見直しと異文化教育の効用―モノからヒトへ－」である。氏は留学の経験を活かし国際文化の領域でのグローバルな研究を得意とする。他国研究者との異文化にかんする共同研究は、他に類をみない鋭い分析視点をもつ。本稿では経営学の領域を国際文化から教育の面に拡大する。教育面でもガラパゴス化が始まっている昨今、地味ではあっても本質的、基盤的な指摘は人的資源分析の視点からも経営学の領域設定面で一石を投ずることになろう。

査読ずみ投稿論文は3本である。まず明山健師論文「EU型マネジメント・システム－戦略的M＆Aとコーポレート・ガバナンス－」は、CGのEU版を分析課題とする。その焦点は企業レベルのM＆A戦略におかれる。

つぎの飯塚重善論文「ビジョン提案型デザイン手法を用いたプロモーション企画実践―ペルソナの設定に関する試み－」は、ICTの応用分野の1つにプロモーション企画を据え、その問題解決のための手法としてビジョン提案型デザインの有用性を提案する。具体的にはペルソナ設定が試みられる。

さらに加藤里美、梁良論文「中国の大学生における企業選択に関する嗜好―希望就職先と仕事の属性における重要性―」は、留学生である中国人の職業や仕事の選択属性分析をしつつ、英語学科と日本語学科専攻での違いを考察する。ある意味で今、話題のテーマの１つである。

経営学の大きなくくりでは、寄稿論文がそれぞれ国家経営、異文化経営教育、経営戦略の対象領域での新提言があった。統一論題「経営学の対象の見直し」の意図を十分に踏んだ内容になっていると思われる。また投稿論文では、それぞれＭ＆ＡとCG、製品開発、職業選択の国際比較が主題になっている。本誌を支えてくれた寄稿者、投稿者に改めて感謝の意を表したい。

神奈川大学国際経営研究所　所長

海老澤　栄一